



第 142 号

発 行 者

東筑摩塩尻教育会

編 集 者

会誌会報委員会

真に必要なものとは

東筑摩塩尻校長会長 佐倉 俊



とは何なのか。以下、昔話を述べることをご容赦いただきたいと思う。

「Aさんを絶対にいじめない。お互いに言いたいことを言い合えるクラスにしたい。」六月下旬のある日、下校時刻を過ぎた放課後の職員室に、中学二年の女子生徒五名が誓いの文を持って現れた。三人はいわゆる加害者、一人はいわゆる被害者、そして一人はいわゆる傍観者。

このクラスには中学一年時より、Aさんに対するいじめがあった。担任であった私の学級経営の至らなから、問題の認識はできていたものの、解決できない日々が続いていた。当然、絶対に許さないという姿勢で指導に臨み、生徒たちからの聞き取り、個別指導、全体指導を繰り返して行っていたが、私に足りなかったのは、事件が起こる度に対処しているだけで、「学級経営」をしていなかったこ

とであった。そのことに気づかせていただいたのは、先輩の先生方からの助言であった。それから、先輩の先生方の学級経営を必死に学び始めた。多くのことを先生方から教えていただいたが、その中の一つに、目的追求班編成の手法があった。具体的には、小学校の時の活動も想起させながら、班単位で自分たちの行いたい活動をゼロから考えてみるよう促すことから始めた。考える際のポイントは、クラスのためになる活動、クラスのみならず楽しめる活動とし、生徒たちの提案したことは、基本的にはすべてそのまま受け入れるようにした。すると、生徒たちは、このような活動があればクラスの生活がもっと快適になる、もっと楽しくなると自ら積極的に提案し、具体案を作成し、実行へと移すようになっていった。子どもたちは本来、遊ぶことが好きなので、最初の頃は学級レクの提案が多くなされた。その際にも、「クラスのために」「クラスのみんなが楽しめる」という視点から、生徒自らが、心構えやルールの必要性に気づき、活動を創り上げていくことが多く見られた。やがて、各班の活動が回りだし、自分たちで自分たちのクラスを高めていくとする動きが見え始め、学級レク以外にもクラスの環境整備や給食当番など日常生活をよりよくしていくための活動が、随所に見られるようになっていった。

生徒たち一人一人の様子も徐々に安定し始めてきたと感じていたある日、今まで傍観者でいたBさんがクラスに向かつて発言を始めた。「今のクラスの状態では、とても登山になんて行けないと思います。命にかかわる行事だから、もっとお互いのことを大切にできるクラスにしないと。」このBさんの発言をきっかけに話し合いが始まり、強い立場であった生徒たちも、弱い立場であった生徒たちも、そして傍観者であった生徒たちも、泣きながら本音を語り合い、最終的に冒頭の誓いの文をクラス全員の合意のもと作成するに至ったそうである。「そうである」と書いたとおり、私は、Bさんから「私たちに時間をください。先生は席をはずしてください。」と言われ、職員室に待機をしていただけなので、実際のところは分からない。私は、このことから、いかに自分が生徒たちのことを信用していなかったか、いかに強い立場の生徒たちをはじめ生徒のよさを認め活躍できる場をつくってこなかったか、いかに傍観者でいた生徒たちが自信をもって発言できる雰囲気をつくってこなかったか、を思い知らされた。学級担任として生徒一人一人が活躍できる場をつくり、そのよさが認められるように「経営」をすることで、生徒たちは自らを高め、自らのあり方を生徒たち自身が決めることを、生徒たちの姿から教えてもらった。

その日は下校時刻を過ぎていたため、生徒たちは先生方に付き添っていた。下校をした。Bさんを送り届けた際、「本当にありがとう」と握手をして別れたことを、今でも鮮明に覚えている。(塩尻中)

「学校は、何のためにあるのか」コロナ禍の学校を経験した私の中に、常にこの問いがある。私は、この問いに対する答えのヒントが、OECD Learning Framework 2030の中にあるように思う。その中で、個人のウェルビーイングと集団のウェルビーイングに向け、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマを克服する力」「責任ある行動をとる力」が必要と述べられている。このような力を子どもたちに育み、たくましく社会を生き抜いていけるようにするために、真に必要なもの

特集 ◆我が校のチャレンジ

すべての児童が安心して

楽しく通える

学校をめざして

洗馬小学校 松尾直敬

洗馬小学校のめざす学校像「みんなで作る楽しい学校」と校長の願いである「にこにこ育つ『洗馬っ子』、わくわく学ぶ『洗馬っ子』」の具現に向けて、一人ひとりに寄り添った指導により、多様な子どもたちの学びを保障し、児童が安心して楽しく通える学校をめざして取り組んでいます。本校の取り組みについて紹介します。

(1) 関係職員の連携の構築

学校全体として、一人ひとりの児童に對して、できるだけ多くの職員が関わることでできるような体制づくりを構築しています。学級担任を中心に、必要に応じて養護教諭、自・情障学級担任、知障学級担任、教頭等が連絡を取り合いながら、不登校傾向の児童に對して、継続して登校できる支援を考えています。また、校内支援会議を定期的に行い、児童や保護者の思いを共有すると共に、今後の支援の方向について考える機会としています。

す。

(2) 居場所づくり

児童が不安なく学校生活を過ごすことのできる環境（居場所）づくりについて、保護者や関係職員、市配置の「子と親の心の支援員」と連携を図りながら取り組んでいます。実際に、保健室や特別支援学級を利用しながら、朝から学校生活を過ごすことができている児童がいます。また、原学級との関わりを断つことがないように、一日の中で級友と関わることでできるような取り組みも継続して行っています。児童が興味のある教科への授業参加を促したり、給食の時間にクラスの子たちと一緒に配膳の準備を行ったりもしています。給食を保健室などの別室で食べている児童には、学級担任がタブレット端末を利用して、教室とリモートで繋がることでできるように工夫し、教室の給食の様子を見ながら食べられるようにしました。

(3) 児童との関係づくり

保健室などの別室で給食を食べている児童については、養護教諭や特別支援学級担任、教頭と一緒に食べるようにし、午前中の活動（学習）の様子を聞きながら、児童のがんばりを認めたり、午後の

見通しや楽しみを確認したりするようにしています。また、週初めに登校を渋ったり、一緒に登校してきた保護者から離れられなかったりする傾向があるため、前週のうちに翌週の見通しや楽しみなことを伝えるようにしています。週初めから登校できた時には、登校時の関わりを大切にし、担任だけでなく、他の教職員も声をかけたり、一緒に活動を行ったりしています。

(4) 保護者との関係づくり

学級担任が他の児童への関わりのため等で対応できない場合でも心を開いて話してくれる関係をつくるために、教頭が朝と帰りの送迎時に保護者に声をかけ、家庭での様子や気持ちの変化などについて聞いたり、学校での興味をもつて取り組んだ学習の姿や友達との関わりがあった場面について話したりしながら、気軽に保護者が話せる雰囲気づくりに努めています。また、支援会議とは別に、学校職員、保護者、子と親の心の支援員の三者で懇談をする機会を定期的に行うようにもしています。

(5) 幼保小の連携

本校の児童の約九割が、隣接する妙義保育園から入学してきます。隣接しているという立地を生かして、年間を通して園児と児童との交流活動が行われています。特に年長児と一学年児童との交流に力を入れています。「どろんこ交流」「プ

ール交流」など、本年度も交流を継続して行ってきました。交流の場を通して、学校職員が来入児の様子を観察したり、その都度、保育園職員と情報共有を行ったりしています。実際に活動している姿を見ながら、就学前から来入児一人ひとりの様子を丁寧に把握するようにしています。したがって、入学時から、子どもたちの特性を捉えた支援の方向を学校職員で共有することができ、多様な子どもたちの学びの保障という点においても、入学後すぐに取り組むことができます。そのことで、一年生のどの子も、安心して学校生活を過ごすことができていると感じています。

これからも、以上のような取り組みを継続しながら、すべての児童が安心して楽しく通える学校をめざして学校全体でチャレンジしていきたいと思っています。



メデイアと上手に
つきあおう

麻績小学校 西沢克弥

麻績小学校では、一人一台配付されたiPadを家庭にも持ち帰り、いつでも活用できるようにしています。子どもたちは、共有機能の利用に慣れ、その有効性を認識しながら学習に取り組んでいます。また、iPadが各自の手元にあることによって、学校生活の中での多くの役割を果たし、利活用の可能性をますます広げています。

一方で保護者からは、「子どもたちがiPadを学習以外の用途で使っているのが気になります。ICT教育の素晴らしさは理解しています。しかし、十分にネットリテラシー教育がされていない子どもたちにiPadのようなデバイスを渡してしまえば、このような姿が出てくることは容易に想像できるかと思えます。親の方もこのような子どもたちにとどるように教育していけば良いのかわからず困惑しています。子どもたち、保護者ともに適切なネットリテラシー教育の機会を与えていただければありがたいです。」と、このような声も聞こえてきました。

また、村からは、児童生徒の生活習慣や学習習慣の向上のため、毎月十日を『ノーマディアデー』とし、テレビやゲーム



パソコン、スマートフォンなどの電子メディア機器の使用時間を減らすことを目的に、小・中学校でノーメディアデーの取り組みを進めたいという提案がありました。

そこで、「メディアと上手につきあえる子ども」の育成を目指し、メディアリテラシー、メディアコントロール教育について、学校と家庭で連携してより一層しっかりと取り組む必要があると考え、次のような試みをしてみました。

一つ目は、七月の土曜参観日を利用して、「メディアアとの上手なつきあい方」子どもの健康とメディア」というテーマで全校児童、保護者、教職員みんなで学び合う機会を設けました。その日の内容は、始めにメディア信州運営委員 島津和浩氏に子どもの健康とメディアについて、親子で学ぶご講演をいただきました。次に、学校保健委員会とPTA協議

委員会の共催でPTA学習会を行いました。メディアと関わる時間が増えていることによる弊害を、体力・運動習慣、健康・生活習慣、食育の面で子どもたちのデータやアンケートをもとにして、島津氏のお話を交え、学校や家庭での取り組みのあり方を考え合いました。最後の学級懇談会では、各家庭での子どもたちの様子や悩みを、担任を交えて情報、意見交換する時間を設けました。

実施後「土曜日午前開催、親と子どもが同じ内容の話を聞き一緒に考えることができるらしい開催方式だと思った。」「メディア関連で悩んでいる親も多く、困っていたことだったと思うのでわかりやすい内容で心に届いた。」「体力、保健食育の発表も子どもたちの現状を知りたい機会だった。危機感をもち子どもが健全に発育していくように、親子で生活習慣の見直しが必要だと思った。」など多くの感想が保護者より寄せられました。

二つ目は、夏休み明けに行った児童会健康委員会主催の「メディア見直し週間」です。長期休み後の自分の生活をふり返りながら、健康委員が「メディア見直し」を提案しました。全校児童に関心をもつて取り組んでもらうようにと、クイズラリー、学年対抗メディアレベルチェックカード、朝の健康集会を企画し実施することを通して、メディアと健康について考え、自発的にノーメディアで過ごせるようにしようと思いました。児童会の子どもたちが主体となつて、全校に「メデ

「イアと上手につきあおう」と呼びかけることで、子どもたちの中から、メディアと接する時間をコントロールしたり、余暇の時間の過ごし方を考えて行動したりする姿が出てくることを期待しました。

翌週の四年生の日記にこんなことが書かれていました。

「久しぶりにお父さんとキャッチボールをしました。この前の健康集会で、外でいろいろな感覚を身につける体験や遊びがとても大切だということを知りました。ゲームもいいけど外で遊ぶこともいいなと思いました。」

このような子どもたちが増えていくことを願い、主体は子どもと保護者としてこれからも「メディアと上手につきあえる子ども」の育成を目指した取り組みにチャレンジしていきたいと思います。



会員アンケートより

「今さら聞けない学級のルール」として多くの先生方からご回答をいただきありがとうございます。少しでも先生方の学級経営のお役に立てれば幸いです。

①給食当番編

給食当番のルール

- 交代制…給食当番は、1週間ごとや毎日交代で行われることが多い。クラスをいくつかのグループに分け、当番をローテーションで担当する。担当する役割は公平に割り振られる。
- 役割分担…当番は、配膳や片付け、クラス全体の進行などの役割を担う。リーダーを設ける学級もある。
- 名簿順・ルーレット方式…当番の決め方は名簿順やルーレット方式で、公平に順番が回るようにしている。
- 量の加減
- 食前に調整…児童生徒が給食を食べる前に、自分の食べられる量を申告して調整する。「少なめ」「普通」「多め」などの選択肢を用意する学級が多い。
- 残さず食べる指導…基本的に盛られた分は残さず食べることを推奨。ただし、どうしても無理な場合は担任に相談するなど柔軟に対応。
- 苦手な食材対応…一口だけでも挑戦するように声掛けを行うが、無理強いはない。アレルギーや体調不良の場合には特別な配慮がされる。
- おかわりのルール
- おかわりは食べ終わった後に…おかわ

りを希望する児童生徒は、まず自分の分を食べきった後におかわりを申請する。公平な分配…数に限りのあるものについては、じゃんけんやクジで公平に決める。特定のルールを設けて、おかわりの機会を平等にする。

・おかわりの制限…一部の学級では、最初に量を減らした児童生徒はおかわりできないルールもある。

給食の進行

- 「いただきます」のタイミング…全員が配膳を終えたら「いただきます」をして、食事を始める。おかわりや量の調整はその後行われる。
- 時間管理…多くのクラスで、給食の終了時間が固定されており、食べ終わらない場合でも強制終了の時間が設けられている。
- 食後の活動…食べ終わった生徒は、歯磨きをする、読書をする、静かに過ごすなどのルールがある。
- 給食の文化と配慮
- 感謝の気持ちを大切に…食べ物を無駄にしない、作ってくれた人に感謝するという姿勢が重視されている。
- アレルギー対応…アレルギーのある生徒には特別な配慮がなされ、食べられる量やメニューの調整が行われる。
- このように、各学級では児童生徒が気持ちよく給食を楽しみ、協力し合いながらスムーズに進行できるよう、さまざまなルールが設定されています。

②掃除当番編

掃除分担の決定とローテーション

- 交代頻度…掃除の分担は1週間から2

週間ごとにローテーションされることが多い。学期ごとや1か月ごとに交代する場合もある。

・役割分担…掃除場所やほうき・雑巾などの役割は、班内で相談して決めることが多く、担当を頻繁に変更しないようにしている。また、担当場所を固定する場合もある。

・トイレ掃除…トイレ掃除は男女別に名簿順で担当を決め、一定期間ごとに交代する。

掃除のルールと進行

- 無言清掃…無言で掃除を行うことが多く、集中して取り組むよう指導されている。終了時には自己評価を行うクラスもある。
- 時間いっぱい掃除…時間いっぱいまで掃除を行い、早く終わった場合は「気づき清掃」や他の仕事に取り組むようにしている。
- 班のリーダー制…班には掃除リーダーを設け、目標設定や進捗管理を行う班もある。リーダーが掃除の仕方を教える場合もある。
- 特別な取り組み
- 気づき清掃…早く終わった後、気づいた汚れを自発的に掃除する「気づき清掃」を奨励しているクラスも多い。
- 相談制度…自分の体調や気分によって掃除に集中できない場合、教師に相談する仕組みを設けている場合もある。
- 工夫と改善
- 掃除の質向上…隅々まできれいにするための工夫として、膝をついて雑巾がけを行うことや、終了時に評価を行うクラスがある。また、掃除道具の使い

方や掃除の進め方についても指導を行う。

・子どもたち主体の決定…掃除場所や分担を、子どもたち同士で話し合いながら決めるクラスもあり、責任感を持って取り組むよう指導している。

その他の特徴

・ルーレット方式…掃除場所や役割の分担をルーレットで決めるクラスが多く、1週間ごとや2週間ごとに交代する。

・掃除の合言葉や目標設定…掃除を楽しむために、目標や合言葉を設定して掃除に取り組むクラスもある。

このように、掃除のルールは各学級で工夫されており、児童生徒たちが責任感を持って協力しながら掃除に取り組めるようにするための取り組みが多く見られます。

編集後記

学校では、時代の変化に伴い多くの課題が生じていますが、先生方が新しい工夫や挑戦をされていることから学ばせていただくことが編集をさせていただきました。

お忙しい中、ご寄稿くださいました皆様に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

